

新たな自己愛傾向尺度の作成と妥当性の検討

—過去の経験との関連を通して—

筑波大学大学院人間総合科学研究科 三浦 絵美

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 吉田富二雄

Examining a new narcissistic personality scale and its construct validity

Emi Miura (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Fujio Yoshida (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba 305-8572, Japan*)

The main purpose of the present study is to construct a narcissistic personality questionnaire that measures grandiosity and sensitive traits. Factor analyses identified four factors: self-glorification, selfhood, sensitivity to evaluation and need for admiration. The internal consistency of each subscale was assessed with Cronbach's alpha coefficient. We examined the relation between narcissism subscales, praise-seeking and rejection-avoidance needs, descriptions of past events and causal attributions for past events to test its construct validity. Self-glorification, selfhood and need for attention showed a positive relation to praise-seeking, while sensitivity to evaluation showed a positive relation to rejection-avoidance needs. In terms of positive past events, self-glorification and need for attention were related to longer event descriptions, self-glorification was related to internal attribution, and sensitivity to evaluations was related to external attribution. In terms of negative past events, self-glorification was related to external attribution and sensitivity to evaluations was related to internal attribution. These results are generally consistent with the hypothesis.

Key words: narcissistic personality scale, grandiose traits, hyper-sensitive traits, praise seeking, rejection avoidance, past events

問題と目的

自己愛の概念化は、自己愛理論の双璧をなす Kohut と Kernberg とによって 1970 年代に最盛期を迎えた。Kernberg は自我構造の病的発達の結果として自己愛の病理を捉え、その特徴として誇大自己や要求がましさ、高い攻撃性を指摘した (Kernberg, 1976 前田監訳, 1983)。一方、Kohut は独自の自己心理学の観点から、乳幼児期の早期発達段階における障害として自己愛の病理を論じている。その特徴として、誇大自己や共感の欠如、賞賛への欲求に

加えて、劣等感や無価値感、他者からの評価や侮蔑への過敏さを指摘している (Kohut, 1971 水野・笠原監訳 1994)。1980 年代に入ると、Kernberg と Kohut の議論を統合する試みがなされた。例えば、Akhtar & Thomson (1982) は、自己愛性人格障害を Overt な面 (自尊心や誇大感など) と Covert な面 (過度の敏感さや劣等感、無価値感) とに分類している。また Broucek (1982) は、誇大な特徴を持つ自己中心型 (egotistical narcissist) と、恥を感じやすく引きこもりがちで解離型 (dissociative narcissist) とに分類している。Gabbard (1994 館監

訳 1997) は自己愛を2タイプに分類した先行研究を概観し、周囲を気にかけない無関心型 (oblivious type) と周囲を過剰に気にする過剰警戒型 (hyper vigilant type) とに分類した。Gabbard (1994 館監訳 1997) によると、両者は自己評価を維持しようとする欲求の高さが一致しているが、その対処の仕方が異なるため表出形態が異なるという。また、実際の患者は、傲慢で自己中心的な誇大性または敏感で抑うつ的な過敏性のいずれかが顕著であるか、あるいは、どちらの特徴も混在して表出すると述べている。この指摘に倣い、本研究では自己愛を類型として議論するのではなく、誇大さや自己中心性、賞賛への欲求、他者評価への敏感さや劣等感といった下位概念を含むものとして扱うこととする。

心理学領域における自己愛研究では、これまで自己愛の過敏な側面が考慮されてこなかった。その原因として、測定尺度の問題が指摘される。Raskin & Hall (1979) によって開発された Narcissistic Personality Inventory (以下 NPI と略す) は、もっとも多く使用されている自己愛の測定尺度である。わが国では、NPI の邦訳版 (大石・福田・篠置, 1987) やその短縮版 (小塩, 1999) が頻繁に用いられている。しかし、NPI は DSM-III に記載されている自己愛性人格障害の診断基準 (American Psychiatric Association, 1980) をもとに開発されており、その内容は誇大自己や共感性の欠如、特権意識の高さといった誇大的な特徴により構成される。そのため、NPI を用いた先行研究は必然的に自己愛の誇大性のみを研究対象することとなる。

こうした問題点を踏まえて、自己愛の過敏性を含めた尺度開発が行われた。例えば、高橋 (1998) や中山・中谷 (2006) は Gabbard (1994 館監訳 1997) による無関心型と過剰警戒型の2タイプの観点から尺度を作成した。また、相澤 (2002) は過敏性と対人恐怖心性との類似性に着眼し、対人恐怖傾向尺度の項目を使用して尺度作成を行った。他には、上地・宮下 (2002, 2005) は Kohut の自己心理学の理論をもとに自己愛の「脆弱性 (vulnerability)」を測定する尺度を開発した。しかし、これらの先行研究の問題として以下三点が挙げられる。第一に自己愛の過敏性と対人恐怖心性を同義に扱っている点、第二に誇大性と過敏性とを類型論的に二側面のみで据えているため、自己愛の諸側面を網羅していない点、第三に自己愛の過敏さ (脆弱性) に特化した尺度構成のため誇大さに関わる諸特徴が測定できない点が挙げられる。

以上の点から、本研究では過敏さを含めた自己愛の構造を再検討することを第一の目的とする。そ

の際、DSM-III (American Psychiatric Association, 1980) に記載されている基準 (誇大自己、賞賛への欲求、他者への非共感、嫉妬の感じやすさ) にもとづいて、先行研究 (相澤, 2002; 小塩, 1999; 堤, 2006) より項目を収集する。過敏さの項目に関しては、Kohut (1971 水野・笠原監訳 1994) や Gabbard (1994 館監訳 1997) が示した、「他者からの評価・侮蔑への過敏さ」や「周囲を気に掛ける」特徴を示す項目を先行研究 (高橋, 1998) より収集する。

さらに、作成した尺度の妥当性を検討することを第二の目的とする。その際、以下の二つの観点から検討を行う。一つは、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求 (菅原, 1986; 小島・太田・菅原, 2003) の観点である。菅原 (1986) は、他者に与えたい自己のイメージの目標設定には二つのパターンがあると主張した。自分の能力の高さや威厳を印象づけることで、賞賛や注目といった肯定的評価を得る「賞賛されたい欲求」と、他者から悪い評価や批判、拒否といった否定的評価を避ける「拒否されたくない欲求」である。自己愛の下位概念のうち、誇大自己や共感性の欠如、賞賛への欲求といった特徴は、自分自身を一方向的にアピールするような賞賛獲得欲求と正の相関を示し、他者評価に敏感な特徴は拒否回避欲求と正の相関を示すと予測される (仮説1)。

もう一つは、Morf & Rhodewalt (1993, 2001) が主張した、自己愛者にみられる「動機づけられた自己構築 (motivated self-construction)」の観点である。自己愛者は、誇大自己を確証したいという動機づけが高いために、理想的な自己像を支持する証拠を求めるという。そのため、ポジティブな出来事は自己評価を高揚させる証拠として、ネガティブな出来事は自己評価を脅かす証拠とならないように解釈すると考えられている (Morf & Rhodewalt, 1993; Rhodewalt & Morf, 1995, 1998)。また Ladd, Cay, Vitulli, Labbè & Law (1997) は、誇大自己や自己顕示欲の高い自己愛者は、ポジティブな出来事を自分自身に帰属することを実証している。これらの知見を踏まえて、本研究では過去の経験に注目し、実際に経験した過去の出来事 (ポジティブ・ネガティブ) の記述を求め、その記述量と出来事の原因帰属を検討する。自己愛の下位概念のうち、誇大自己や賞賛への欲求といった特徴は、自己評価を高揚するようなポジティブ経験の記述が促進され、自分の能力に帰属すると予測される (仮説2)。一方、過敏な特徴は、批判や拒否といったネガティブな出来事に注意が向きやすいと考えられるため、ネガティブ経験の記述が多いのではないかと考えられる (仮説3)。また、劣等感や無価値感 (Kohut, 1971 水野・

笠原監訳 1994) という特徴を有することから、ネガティブ経験は自分の能力の低さに帰属すると予測される(仮説4)。

方 法

調査対象者と手続き

茨城県および東京都の大学生を対象に、講義時間を利用して質問紙を一齐配布した。回答者への負担を考慮し、質問紙Aと質問紙Bの二種類を作成した。質問紙Aは講義時間内に回答を求め、質問紙Bは各自持ち帰り、翌週の講義時間に回収した。質問紙Aの有効回答者は309名(男性138名、女性170名、不明1名)、平均年齢は19.39歳であった。質問紙Bの有効回答者は222名(男性97名、女性124名、不明1名)、平均年齢は19.34歳であった。なお、質問紙Aと質問紙Bの回答者が同定できるよう、質問紙には通し番号が印字された。

調査内容

質問紙A (1) **自己愛** 誇大感や賞賛欲求をあらわす項目は、NPI-S(小塩, 1999)を参考に作成した。他者への非共感や、嫉妬の感じやすさをあらわす項目は相澤(2002)や堤(2006)を参考に作成した。過敏さをあらわす項目は、Gabbardの理論を踏襲した高橋(1998)を使用した。全47項目について、「1. 全然あてはまらない」から「6. 非常にあてはまる」までの6件法で評定を求めた。(2) **賞賛獲得欲求・拒否回避欲求** 小島他(2003)の賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度を使用した。各項目について「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」までの5件法で評定を求めた。

質問紙B (1) **ポジティブ経験・ネガティブ経験の自由記述** ポジティブ経験とネガティブ経験それぞれについて、「学業」「部活動」「友人関係」「恋愛」「趣味・習い事」の5領域の手がかり語を呈示した。各領域につき最大3エピソード(計15エピソード)まで記述を求めた。その中で、もっとも印象的な経験の一つだけを選択し、以降の質問項目に関しては、選択した経験について回答するよう求めた。(2) **帰属傾向** Weiner(1979)を参考に、原因の位置(内的・外的)、統制可能性(可能・不可能)の次元の組み合わせによって各2項目(計8項目)を作成した。各項目について、「1. 全くあてはまらない」から「4. 非常にあてはまる」までの4件法で評定を求めた。

調査時期

2007年11月中旬から12月下旬であった。

結 果

自己愛の因子構造

自己愛の47項目について、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。複数の因子に.40以上の負荷量を示した項目と、いずれの因子においても.40以下の負荷量を示した項目を削除し、再び因子分析を行った。固有値の変化と解釈可能性から、最終的に4因子構造を採用した(Table 1)。

第1因子には「自分は、他の人とは違う、特別な才能を持っている」「きっと将来成功するのではないかと思う」「自分は、生まれながらのリーダーである」など自分自身の能力や将来性、人間性を過大評価する傾向をあらわす項目が高い負荷量を示していた。したがって、第1因子を「誇大感」と命名した。第2因子には「周囲に困っている人がいても気にならない」「欲しいものを手に入れるためなら、他人を利用してかまわない」「自分の得意なことを自分よりできる人がいると怒りを感じる」など他者を軽んじたり利用したりする意識と、自分よりも優れた他者に対して怒りを感じるといった自己中心的傾向をあらわす項目が高い負荷量を示していた。したがって、第2因子を「自己本位性」と命名した。第3因子には「周囲の人の様子をいつもうかがってしまう」「批判を受けないように、引っ込み思案になる」「他人が自分に対して、どのような反応をするかとても気になる」など他人からの評価や批判に対する敏感さをあらわす項目が高い負荷量を示していた。したがって、第3因子を「評価への敏感さ」と命名した。第4因子には「多くの人から褒められたい」「みんなの人気者になりたい」「周囲の人達が自分のためにいろいろしてくれることを期待している」など他人から認められ持てはやされることを求める傾向をあらわす項目が高い負荷量を示していた。したがって、第4因子を「賞賛欲求」と命名した。各因子の信頼性係数 α は、第1因子から順に.90, .87, .86, .85であった。因子ごとに評定値を合計し、項目数で割った値を各因子の尺度得点とした。

次に、下位尺度間の関連を検討するため相関係数を算出した(Table 2)。その結果、誇大感は自己本位性および賞賛欲求と正の相関を示したが、評価への過敏さとは有意な相関は示さなかった。また、評価への過敏さは自己本位性と賞賛欲求と正の相関を示した。そして、自己本位性は賞賛欲求と正の相関を示した。

自己愛と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連

まず、全18項目について因子分析(主因子法・

Table 1 自己愛の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

	F1	F2	F3	F4	Mean	SD
F 1 誇大感 ($\alpha = .90$)						
自分は、他の人とは違う、特別な才能を持っている	.85	-.04	.09	-.14	2.52	1.26
周りの人達より優れた才能をもっている	.80	.05	-.04	-.16	2.77	1.22
きっと将来成功するのではないかと思う	.79	-.20	.02	.02	3.07	1.35
周りの人達より有能な人間である	.71	-.10	-.17	-.02	2.88	1.22
自分は他に並ぶ人がいないくらい、特別な人間である	.69	-.01	.06	-.09	2.11	1.26
自分は、生まれながらのリーダーである	.67	-.01	-.04	-.03	2.06	1.22
周囲の人よりも特別な考え方や行動をする	.61	.08	.02	-.05	3.23	1.37
今までに類まれな経験をつんできた	.61	-.08	.03	.00	2.83	1.35
自分は尊敬されて当然の人間である	.59	.20	.12	-.07	1.88	1.06
自分がすると、物事はもっと上手くいく	.59	.25	-.01	-.02	2.65	1.17
将来成功した自分の姿を想像する	.53	-.09	.17	.13	3.39	1.51
自分の思い通りに人を使うことは、それほど難しくはない	.51	.21	-.21	.04	2.43	1.24
自分は個性の強い人間である	.49	-.09	-.14	.15	3.64	1.39
自分が偉大な人間になっているような空想をする	.43	.00	.07	.11	2.94	1.48
人からの助けを手に入れることがうまい	.42	-.13	-.02	.16	3.05	1.20
F 2 自己本位性 ($\alpha = .87$)						
周囲に困っている人がいても気にならない	-.09	.70	-.13	-.20	2.05	0.97
欲しいものを手に入れるためなら、他人を利用してもかまわない	.12	.65	-.18	.06	2.63	1.33
自分の得意なことを自分よりできる人がいると怒りを感じる	.15	.64	.20	-.09	2.71	1.36
他人に不幸なことが起こっても、自分に直接関係なければ気にしない	-.04	.63	-.27	.04	2.70	1.27
喜んでいる人を見ても、その人と同じような気持ちにはならない	-.04	.61	-.07	-.07	2.82	1.19
自分が出来なかったことを他人にされると不愉快である	-.01	.60	.16	.12	3.28	1.33
自分の得意なことを他人にされると不愉快である	.10	.54	.22	-.05	3.19	1.32
自分よりも友達の方が人気があることは許せない	.06	.52	.09	.19	2.34	1.26
他人の成功をみるととても悔しい	.02	.52	.14	-.02	3.23	1.38
自分のために友達を利用しても構わない	.05	.50	-.17	.18	2.64	1.34
周囲の人達が自分に接するときの態度に、腹が立つことがある	-.02	.49	.15	.18	3.43	1.33
周囲に悩んでいる人がいても、気づかないことが多い	-.34	.48	.04	-.06	2.77	1.10
友人がどう考えているかについて勘違いすることが多い	-.18	.46	.32	-.05	3.15	1.31
F 3 評価への敏感さ ($\alpha = .86$)						
周囲の人の様子をいつもうかがってしまう	.04	-.20	.82	.09	4.40	1.34
他人が自分に対して、悪口を言ったり批判をしていないかとても気になる	.04	-.09	.80	-.03	4.17	1.45
批判を受けないように、引込み思案になる	-.13	.07	.77	-.11	3.65	1.46
他人が自分に対して、どのような反応をするかとても気になる	.07	-.19	.76	.13	4.69	1.32
ちょっとした批判でもすぐに傷ついてしまう	.02	.09	.62	-.07	3.75	1.53
他人に間違いや欠点を指摘されると、自分の全てが否定されたように感じる	-.07	.22	.56	-.04	3.47	1.54
F 4 賞賛欲求 ($\alpha = .85$)						
多くの人から褒められたい	-.11	-.24	.05	.93	4.42	1.24
周囲の人達から賞賛されたい	-.04	.07	-.01	.81	3.81	1.35
みんなの人気者になりたい	.03	-.07	.07	.69	3.79	1.37
周囲の人達が自分のためにいろいろしてくれることを期待している	-.05	.17	.06	.55	3.29	1.23
助けてくれる友達が多ければ多いほどいい	-.11	-.08	-.11	.51	4.46	1.25
人々を従わせられるような権威をもちたい	.15	.11	-.05	.50	3.14	1.36
権威や権力を持ちたいという気持ちが強い	.20	.12	-.10	.49	3.11	1.44
自分の才能や業績について褒められることは重要である	.06	.16	-.02	.45	4.13	1.31
周囲の人達から賞賛されたい賞賛されるために物事をする必要がある	.16	.08	.13	.44	3.48	1.36
因子間相関	F1	.48	.01	.46		
	F2		.34	.48		
	F3			.48		

バリマックス回転)を行った。その結果、小島他(2003)と同様、第1因子には賞賛獲得欲求を示す項目が高い負荷量を示し、第2因子には拒否回避欲求を示す項目が高い負荷量を示した。各因子の信頼性係数 α は、第1因子が.84、第2因子が.83であり、内の一貫性は十分であると判断された。因子ごとに評定値を合計し、項目数で割った値を各因子の尺度得点とした。

次に、自己愛の下位尺度の妥当性を検討するため、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との相関係数を算出した(Table 3)。その結果、誇大感と自己本位性、賞賛欲求はそれぞれ賞賛獲得欲求と中程度の正の相関を示した。一方、評価への敏感さは拒否回避欲求との間に強い正の相関を示した。これらの結果は、仮説1を支持するものであり、自己愛傾向尺度の構成概念妥当性が示されたといえる。

自己愛と過去の経験との関連

(a) 自己愛と過去の経験の記述数 ポジティブ経験とネガティブ経験における各5領域の記述数と合計数の平均値および標準偏差を求めた(Table 4)。いずれの領域においてもポジティブ経験の記述数が多かった。また、5領域の各記述数については、ポジティブ経験とネガティブ経験いずれにおいても「学業」がもっとも多く、次いで「部活動」「友人関係」の順であった。なお、本研究ではポジティブ経験とネガティブ経験の記述合計数を分析対象とした。

次に、自己愛が過去の経験(ポジティブ・ネガティブ)の記述数に及ぼす影響を検討するために、自己愛の各下位尺度を説明変数、ポジティブ経験および

ネガティブ経験の記述合計数を基準変数とした重回帰分析(変数増減法)を行った(Fig. 1)。その結果、誇大感と賞賛欲求はポジティブ経験の記述合計数に有意な正の影響を及ぼしていた。自己本位性はポジティブ経験の記述合計数に有意な負の影響を及ぼしており、一方、評価への敏感さはいずれの記述合計数にも影響を及ぼしていなかった。この結果は、自己愛の下位概念のうち誇大さがポジティブ経験の記述を促進するという仮説2を支持する結果となったが、過敏さがネガティブ経験の記述を促進するという仮説3は支持されなかった。この原因については、考察で議論を行う。

(b) 自己愛と過去の経験への原因帰属 ポジティブ経験の原因帰属について、原因の位置(内的・外的)と統制可能性(可能・不可能)の次元から組み合わせた各2項目について相関係数を算出し、一元性を確認した。その結果、「自分の努力(内的・統制可能: $r = .71$)」、「自分の能力(内的・統制不可: $r = .38$)」、「他者の協力(外的・統制可能: $r = .54$)」、「運のよさ(外的・統制不可: $r = .76$)」とそれぞれ中

Table 4 ポジティブ経験とネガティブ経験の各5領域の記述数と記述合計数の基礎統計量(N = 222)

	ポジティブ経験		ネガティブ経験	
	Mean	(SD)	Mean	(SD)
学業	1.63	(0.92)	1.15	(0.82)
部活動	1.57	(1.04)	1.09	(0.87)
友人関係	1.28	(0.98)	0.79	(0.75)
恋愛	0.70	(0.93)	0.59	(0.78)
趣味・習い事	0.88	(0.96)	0.42	(0.73)
全5領域の記述合計	6.06	(3.65)	4.05	(2.97)

各5領域の記述数のレンジ: 0 ~ 3

全5領域の記述合計のレンジ: 0 ~ 15

Table 2 自己愛の下位尺度間の相関係数

	①	②	③	④
①誇大感	—			
②自己本位性	.41**	—		
③評価への敏感さ	-.02	.33**	—	
④賞賛欲求	.48**	.51**	.36**	—

** $p < .01$

Table 3 自己愛の下位尺度と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との相関係数

	賞賛獲得欲求	拒否回避欲求
誇大感	.54**	-.13
自己本位性	.34**	.27**
評価への敏感さ	.12	.64**
賞賛欲求	.57**	.27**

* $p < .05$, ** $p < .01$

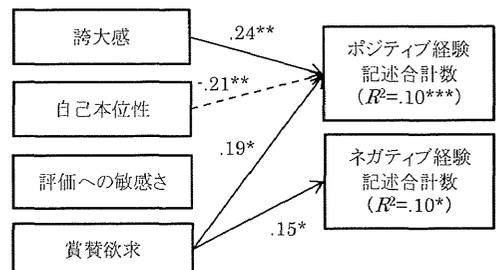


Fig. 1 自己愛の下位尺度がポジティブ経験およびネガティブ経験の記述合計数に及ぼす影響(N = 222)。矢印付近の数値は標準偏回帰係数である(* $p < .05$, ** $p < .01$)。実線は正のパス、破線は負のパスを示す。

程度から高程度の正の相関が見られたため、項目の一次元性が確認されたと判断した（すべて1%水準）。ネガティブ経験の原因帰属も同様に、各2項目の相関係数を算出した。その結果、「自分の努力(内的・統制可能: $r = .55$)」、「自分の能力(内的・統制不可: $r = .48$)」、「他者の非協力(外的・統制可能: $r = .64$)」、「運の悪さ(外的・統制不可: $r = .71$)」とそれぞれ中程度から高程度の正の相関が見られたため、項目の一次元性が確認されたと判断した（すべて1%水準）。各2項目の評定値を合計し、項目数で割って得点化した。

次に、自己愛の下位尺度の妥当性を検討するため、ポジティブ経験の原因帰属との相関係数を算出した（Table 5）。その結果、誇大感、自分の努力や能力といった内的帰属との間に正の相関を示した。一方、評価への敏感さは、他者の協力や運のよさといった外的帰属との間に正の相関を示した。そして、自己本位性と賞賛欲求についてはそれぞれ運のよさといった外的で統制不可能な帰属との間に正の相関を示した。次に、自己愛の下位尺度とネガティブ経験の原因帰属の相関係数を算出した（Table 6）。その結果、誇大感、自分の努力といった内的で統制可能な帰属との間に負の相関を示し、他者の非協力や運の悪さといった外的帰属との間に正の相関を示した。一方、評価への敏感さは自分の能力といった内的帰属との間に正の相関を示した。そして、自己本位性は自分の能力といった内的で統制不可能な帰属、また他者の非協力や運の悪さといった外的帰属

との間に正の相関を示した。以上の結果から、自己愛の下位概念のうち誇大さは、ポジティブ経験を内的に、ネガティブ経験を外的に帰属するという仮説2が支持された。また、過敏さがネガティブ経験を内的に帰属するという仮説4が支持された。

考 察

自己愛の因子構造

本研究では、従来指摘されている自己愛が持つ誇大な特性と過敏な特性とを含む尺度の作成を行った。その結果、誇大感、自己本位性、評価への敏感さ、賞賛欲求の4因子構造を抽出した。

下位尺度間の関連をみると、誇大感と自己本位性、賞賛欲求は互いに中程度の正の相関を示していた。これら3因子はすべて、従来の自己愛の下位概念と一致する。一方、評価への敏感さの項目内容を見ると、Kohutが示した傷つきやすさや、Gabbardが類型化した過剰警戒型の自己愛と一致する。したがって、本研究で抽出された自己愛尺度の下位因子は理論的に指摘される特徴と一致しており、妥当なものであると判断される。さらに下位尺度間の関連を詳細にみると、評価への敏感さは自己本位性と賞賛欲求とそれぞれ中程度の正の相関を示していた。これら3因子の関係は、自己愛における過敏さを論じている理論家の主張から説明できる。例えば、Gabbard (1994 館監訳 1997) は自己愛の無関心型と過剰警戒型に共通する心性として、自己評価を維

Table 5 自己愛の下位尺度と原因帰属の相関係数（ポジティブ経験）

	内的帰属		外的帰属	
	統制可能 (自分の努力)	統制不可能 (自分の能力)	統制可能 (他者の協力)	統制不可能 (運のよさ)
誇大感	.18**	.19**	.11	.13
自己本位性	.06	.06	.03	.23**
評価への敏感さ	.11	-.02	.15*	.14*
賞賛欲求	.11	.12	.11	.20**

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 6 自己愛の下位尺度と原因帰属の相関係数（ネガティブ経験）

	内的帰属		外的帰属	
	統制可能 (自分の努力)	統制不可能 (自分の能力)	統制可能 (他者の非協力)	統制不可能 (運の悪さ)
誇大感	-.16*	-.01	.20**	.29**
自己本位性	.01	.15*	.24**	.28**
評価への敏感さ	.16	.23**	.13	.08
賞賛欲求	.06	.06	.09	.09

* $p < .05$, ** $p < .01$

持しようとする欲求の高さを挙げている。つまり、自己愛における過敏さは、単純に対人場面での萎縮や退却を意味するのではなく、その背景には自己評価を維持する動機づけが存在する。本研究においても、評価に対して敏感であるほど、他者から賞賛され認められるような人物になりたいという欲求（賞賛欲求）や、他者を気に掛けるよりも自分を優先させる自己中心的な傾向（自己本位性）が高いという結果が得られた。

従来の自己愛研究では、誇大性のみを対象とした測定尺度や、誇大さと過敏さを類型論的に二つの下位尺度で捉えた尺度、自己愛の過敏さを対人不安傾向と同義として扱った尺度が開発されてきた。本研究では、誇大感や自己中心性といった誇大さや評価や批判への過敏さをあらわす複数の下位概念を含むものとして尺度化を試みた。その結果、誇大感、自己本位性、評価への敏感さ、賞賛欲求の4因子が抽出され、自己愛の諸特徴をより広くとらえられる新たな尺度が作成された。

自己愛と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連

本研究で作成した自己愛の測定尺度の下位尺度ごとの妥当性を検討するため、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求（小島他、2003）との関連を検討した。その結果、誇大感と自己本位性、賞賛欲求は、他者からの肯定的評価の獲得を目標としやすい賞賛獲得欲求と正の相関を示した。これまで、多くの理論家は（例えば、Akhtar & Thomson, 1982; Broucek, 1982）、自己愛の特徴として慢心した自尊心や傍若無人な自己中心性、そして自己顕示欲の強さを指摘している。賞賛獲得欲求の具体的な項目を見ると、自信に裏打ちされた自己顕示欲の高さが見て取れる。したがって、誇大感、自己本位性そして賞賛欲求が高いほど賞賛獲得欲求も高いという本研究の結果は、それぞれの下位尺度の妥当性を支持する結果といえる。一方、評価への敏感さは、他者による否定的評価の回避を目標としやすい拒否回避欲求と正の相関を示した。自己愛における敏感さの特徴が、「他の人々の反応に敏感であること」や、「侮辱や批判の証拠がないかどうか、注意深く、他の人々に耳を傾ける」（Gaabard, 1994 館監訳 1997）とあるように、過敏さは自分自身の評価が下げられるような状況を回避する欲求、すなわち拒否回避欲求が高いと考えられる。これは予測通りの結果であり、下位尺度（評価への敏感さ）の妥当性を支持する結果といえる。

自己愛と過去の経験との関連

まず、過去に経験した出来事（ポジティブ・ネガ

ティブ）の記述数に関する考察を行い、自己愛尺度の下位尺度ごとの妥当性の検討を行う。誇大感と賞賛欲求はポジティブ経験の記述数に正の影響を示していた。この結果は、誇大自己を確証したいという動機づけの高さが、理想的な自己像を支持する証拠を求める（Morf & Rhodewalt, 1993; Rhodewalt & Morf, 1995, 1998）という主張とも一致する。自分が経験したポジティブな出来事は、自分自身の理想的な自己像を支持する証拠として十分機能すると考えられるため、本研究で得られた結果は妥当であるといえよう。しかし、評価への敏感さは、ポジティブ・ネガティブのいずれの経験の記述合計数にも有意な影響を及ぼしていなかった。他者からの評価に敏感なほど、批判や拒否といったネガティブな出来事に注意が向きやすいと考えられるため、ネガティブ経験の記述数が多いと予測されたが、仮説は支持されなかった。このような特徴を持つ者は他者からの評価に敏感なため、そもそも積極的に他者と関わることがなく、かつネガティブな評価を避けるために消極的な日常生活を送っている可能性がある。そう考えると、ポジティブ・ネガティブの内容に関わらず、経験そのものが多くないと考えられる。

次に、過去の経験の原因帰属の傾向に関する考察を行い、自己愛尺度の下位尺度ごとの妥当性の検討を行う。誇大感、ポジティブ経験を内的に、そしてネガティブ経験を外的に帰属することと関連していた。また、ネガティブ経験において、誇大感が内的で統制可能な帰属と負の関連が見られた。この結果は、ポジティブな出来事は自己評価を高揚させる証拠として、ネガティブな出来事は自己評価を脅かす証拠とならないよう解釈すると主張した Morf & Rhodewalt (1993) や Rhodewalt & Morf (1995, 1998) と一致する。一方、自己本位性は、おおむね外的で統制不可能な対象に帰属する傾向がみられた。自己本位性は、他者利用意識が高いという特徴を持つため、経験の内容（ポジティブ・ネガティブ）に関わらず、内的帰属よりも外的帰属が行われやすいと考えられる。また、統制不可能な帰属がなされたのは、物事の遂行に他者を利用しているにも関わらず、他者の協力的態度に気づかないためであると考えられる。最後に、評価への敏感さは、ポジティブ経験において外的帰属、ネガティブ経験において内的で統制不可能な帰属と関連していた。自己愛における過敏さは、Kohut (1971, 水野・笠原監訳 1994) や Akhtar & Thomson (1982) が指摘するように自信のなさや劣等感、無価値感の特徴を有する。したがって、ポジティブ経験は内的（自分の努力や能力）に帰属されにくい一方で、そのような特

徴を有するがゆえに、ネガティブ経験は内的に帰属されやすいと考えられる。

以上をまとめると、自己愛の下位尺度と各変数との関連はおおむね仮説通りの結果を示しており、本研究で作成された自己愛傾向尺度の構成概念妥当性が示されたと考えられる。

引用文献

- 相澤直樹 (2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, **50**, 215-224.
- Akhtar, S. & Thomson, J.A. (1982). Overview: Narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, **139**, 12-20.
- American Psychiatric Association (1980). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. 3rd Ed. Washington, D.C.: Author.
- Broucek, F. (1982). Shame and its relationship to early narcissistic development. *International Journal of Psychoanalysis*, **63**, 369-378.
- Gabbard, G.O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice*. Washington, D. C.: American Psychiatric Press.
- (ギャバード, G.O. 館 哲朗 (監訳) (1997). 精神力動的臨床精神医学 その臨床実践 [DSM- IV 版] ③臨床編: II 軸障害 岩崎学術出版)
- 上地雄一郎・宮下一博 (2002). コフトの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成の試み 甲南女子大学研究紀要 人間科学編, **38**, 1-10.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフトの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, **14** (1), 80-91.
- Kernberg, O.F. (1976). *Object relations theory and clinical psychoanalysis*. New York: Jason Aronson Inc.
- (カーンバーグ, O. 前田重治 (監訳) (1983). 対象関係論とその臨床 岩崎学術出版)
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self*. New York: International Universities Press.
- (コフト, H. 水野信義・笠原 嘉 (監訳) (1994). 自己の分析 みすず書房)
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, **11**, 86-98.
- Ladd, E.R., Cay, W.M., Vitulli, W.F., Labbè, E.E. & Law, J.G. (1997). Narcissism and causal attribution. *Psychological Reports*, **80**, 171-178.
- Morf, C.C. & Rhodewalt, F. (1993). Narcissism and self-evaluation maintenance: explorations in object relations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 668-676.
- Morf, C.C. & Rhodewalt, F. (2001). Expanding the dynamic self-regulatory processing model of narcissism: Research directions for the future. *Psychological Inquiry*, **12**, 243-251.
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達変化の検討 教育心理学研究, **54**, 188-198.
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 (1987). ナルシズムの人格の基礎的研究 (1) —ナルシズムの人格目録の信頼性と妥当性について— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534-535.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, **8** (1), 1-11.
- Raskin, R. & Hall, C.S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Rhodewalt, F. & Morf, C.C. (1995). Self and interpersonal correlates of the narcissistic personality: A review and new findings. *Journal of Research in Personality*, **29**, 1-23.
- Rhodewalt F. & Morf, C.C. (1998). On self-aggrandizement and anger: A temporal analysis of narcissism and affective reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 672-685.
- 菅原健介 (1986). 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的的自己意識の強い人に見られる2つの欲求について 心理学研究, **57**, 134-140.
- 高橋智子 (1998). 青年のナルシズムに関する研究—ナルシズムの2つの側面を測定する尺度の作成— 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 147.
- 堤 雅雄 (2006). 嫉妬と自己愛: 自己愛欲求が嫉妬感情を喚起させるのか 島根大学教育学部紀要 人文社会科学, **39**, 39-43.
- Weiner, B. (1979). A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology*, **71**, 3-25.

(受稿10月22日: 受理11月10日)